

## N響メンバーによる室内楽

ベートーヴェン生誕250年によせて

### 曲目解説

ベートーヴェンの作品

アレグレット 変ロ長調 Wo0.39

「Wo0」とは「Werk ohne Opuszahl（作品番号なしの作品）」の略で、ベートーヴェンの生前は未出版だったことを表す。本曲は1812年に書かれた単一楽章の作品。ベートーヴェンの友人ブレンターノ夫妻の娘で、ピアノを巧みに奏でたというマクシミリアーネ（当時10歳）に捧げられた（出版は1830年）。ロンド形式で、メロディは素朴だが、各楽器がバランス良く掛け合う。

ヴァイオリンとチェロのための二重奏曲 変ホ長調 Wo0.32 《2つのオブリガート眼鏡付き》より 第1楽章 アレグロ

この一風変わったタイトルを持つ二重奏曲は1796年頃、おそらくベートーヴェンの知り合いの二人の奏者のために作曲され、その二人がともに眼鏡をかけていたため、それをからかうような意味合いがあったと思われる。ソナタ形式の第1楽章と、不完全な形で発見された第2楽章メヌエット、そして断片のみの第3楽章という構成だが、演奏されるのは通常、第1楽章アレグロのみである。ヴァイオリンとチェロの軽妙な掛け合いが楽しく、しかしそれなりに技術的難度が高いため、曲名と相まって演奏機会の少ない曲となっている。

ピアノと管楽のための五重奏曲 変ホ長調 op.16

1800年頃までのベートーヴェンは多くの娯楽音楽を作曲した。本曲もその一つで、この種の作品としては最も成功した例である。1796～97年にウィーンで作曲され、97年の初演は大好評だったと伝えられている。ピアノと4つの管楽器（オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルン）という変わった編成だが、1801年に出版されたのちも、作曲者自身によって様々な編曲版が出版された。

3楽章構成で、第1楽章グラーヴェは、優雅な落ち着きを持った序奏部を経て、ソナタ形式による主部では、軽やかな2つの主題が展開する。第2楽章アンダンテ・カンタービレは、変奏ロンド形式。用いられる2つのエピソード

ドはどちらも短調で、非常に美しい。ロンド・ソナタ形式の第 3 楽章は、軽快なフィナーレとして最後を飾る。

### 七重奏曲 変ホ長調 op. 20

1792 年 11 月に音楽の都ウィーンに出てきたベートーヴェンは、作曲家として成功するためにも、当時のウィーン聴衆の耳にかなう娯楽音楽を書かなければならなかった。1800 年に完成されたこの七重奏曲は、そうしたウィーン趣味の集大成とも言える華やかさを持っている。木管 3 (クラリネット、ホルン、ファゴット) と弦 4 (ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス) という珍しい編成を採用しており、ベートーヴェンにしては軽やかな明るい音楽だが、各楽器の特性をうまくとらえており、単なる娯楽作品とは一線を画した、隠れた名作である。1800 年 4 月、ウィーンのブルク劇場で「交響曲第 1 番」とともに初演され、大成功を収めた。

全体は 6 楽章からなる。第 1 楽章アダージョは、序奏付きのソナタ形式。堂々とした序奏ののち、ヴァイオリンが主題を軽快に奏でる。第 2 楽章アダージョ・カンタービレは、ソナタ形式。クラリネットが美しい主題を朗々と歌い、ヴァイオリンへと受け渡す。第 3 楽章テンポ・ディ・メヌエットは、主部で弦が奏するメロディに、ピアノ・ソナタ第 20 番第 2 楽章のメヌエット主題が使われている。トリオでは管楽器が活躍する。第 4 楽章テーマ・コン・ヴァリアツィオーニは、主題と 5 つの変奏およびコーダ。行進曲風の軽やかな主題は、ライン民謡からの引用と言われている。第 5 楽章は、ホルンとヴァイオリンとの呼応で始まる諧謔的なスケルツォ。トリオではチェロが流麗な旋律を奏でる。第 6 楽章アンダンテ・コン・モート・アラ・マルチャは、序奏付きのソナタ形式。厳粛な序奏に続いて、軽快に刻む第 1 主題と流麗な第 2 主題のコントラストが鮮やか。再現部の前にはヴァイオリンのカデンツも挿入され、いっそう優美な雰囲気醸し出す。最後はプレストで畳みかけるようにヴァイオリンが躍動し、曲を閉じる。